

# 日本語のローマ字書きについて

岩瀬 順一

「オト」は、「音」と書くと「オン」と読まれる可能性があるのでこう書きます。

「ローマ字書き日本語」として、たとえば、芥川龍之介「蜘蛛の糸」が全文ローマ字で書かれた本を想像してください。「ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを」は Aru hi no koto de gozaimasu. Osyakasama wa gokuraku no hasuike no huti o と書かれています。

## § 1 日本語をローマ字書きする利点

### 1.1 日本の子どもにとって

#### 1.1.1 幼いときから読める文字体系である

おとなと同じものが読める、というのは漢字かなまじり文にない特徴である。漢字がむずかしいからというだけの理由で子ども向けの本を別に出す必要がない。

プロ野球のある球団が、こどもの日にはスコアボードの選手の名前をひらがなにするそうだが、ふだんからローマ字書きにしていれば、子どもにも読める。

#### 1.1.2 漢字にとらわれず、自由に文章が書ける

習った漢字で書けるところは漢字で書くという方針のようだが、ローマ字で書けば、漢字のことは気にしないで済む。また、「学こう」のような混ぜ書きをしなくて済む。

#### 1.1.3 分ち書きをするので日本語のしくみがよくわかる

ローマ字では分ち書きをおこなうので、ローマ字文を読み書きすることで、日本語のしくみがよくわかるようになる。

#### 1.1.4 動詞の活用がわかりやすい

否定の「ない」をつけてみて、-anai となるのは五段活用、-inai となるのは上一段活用、-enai となるのは下一段活用、とわかる。

### 1.2 日本人一般にとって

#### 1.2.1 カナよりも徹底して表音主義である

「王」と「追う」はどちらもカナでは「おう」である。しかしローマ字では ô と ou と書き分けるので、発音を間違える可能性が少ない。

「氷」と「公理」は(アクセントを除いて)同じオトであるが、かなでは「こおり」「こうり」と書き分けなければならない。ローマ字では書き分けずに kôri である。

#### 1.2.2 漢字制限を気にしなくて済む

「爬」が常用漢字に含まれていないので「爬虫類」は「は虫類」と書くと覚えなければならず、また、もしも「爬」が常用漢字にはいたら「爬虫類」と改めて書き方を覚えなければならない。ローマ字なら、ずっと hatyûrui である。

### 1.2.3 難しい漢字を覚えなくて済む

「鬱」を覚えなくても、utu で済む。

### 1.2.4 同訓異字を気にせず書ける

「かわく」を、「道が乾く」「のどが渴く」と別の漢字で書き分けるが、ローマ字ではどちらも kawaku でよい。日本語としては同じことばである。

(ローマ字を使うと「見る」「観る」「診る」などの書き分けができなくなるという批判があるが、これらの書き分けを駆使した漢字かなまじり文は、それで一つのジャンル「漢字かなまじり文による書きことば」と考えたい。それは、口語ではあるが、文字にしないと通じないので、一種の「書きことば」である。ローマ字書きの普及は、そのような文章による表現を否定するものではない。)

### 1.2.5 分かれ書き効果のためだけに漢字を使わなくて済む

「爬虫類」の「爬」は常用漢字にはっていない。しかし「ここではよくは虫類を見ます」と書くと単語の切れ目がわかりづらいので「ここではよく爬虫類を見ます」と書きたくなる。ローマ字では koko de wa yoku hatyûrui o mimasu で、問題ない。

### 1.2.6 漢字とかなの混ぜ書きをしないで済む

「改ざん」「ひっ迫」などを見苦しいという人がいるが、ローマ字では kaizan, hippaku で、問題ない。

### 1.2.7 パソコンなどを使うとき、かな漢字変換がいらぬ

ワープロやパソコンの発達で漢字かなまじり文は機械で扱えるようになったが、かな漢字変換で入力する限り、画面を見続けて変換が正しいかどうか気に配らねばならず、脳に負担がかかるそうだ。ローマ字なら、画面を見ないで入力でき、脳への負担が少ない。時間の節約にもなる。

複数の打鍵で漢字・カナなどの一文字を直接に入力する方式がある。たとえば、山田尚勇氏の Tコードなど。これは脳への負担が少ないそうだが、習得にかなりの時間がかかる。(私は自作ソフトで体験済み。変換間違いが絶対がないので、使っていて気分がよかった。)

### 1.2.8 同音異義語が使われにくくなる

ローマ字書きにすると「科学」「化学」がどちらも kagaku になって困るだろうという意見があるが、困るから別の言い方を工夫するようになり、耳で聞いたときにもわかりやすい日本語になる。(この例では、「科学」は science の訳語だから、faculty of science が「理学部」であるのにならって「理学」と言い直す、という提案がある。)

### 1.2.9 視覚障害者への配慮

視力を失われてからの梅棹忠夫氏が、漢字は視覚障害者にはつらい文字だと言っておられた。

点字は表音文字なので、同音異義語が少ないことが望ましい。

### 1.2.10 漢字かなまじり文と比べて、文字の大きさが均一に近い

漢字かなまじり文では「鬱」のように画数の多い文字あり、「し」のように画数の少ない文字ありで、前者に合わせて活字の大きさを決めると相当に大きなものになり、後者に合わせると「鬱」では文字が小さすぎることになる。

ローマ字ではそれが無い。目に負担が少ないと言えよう。

### 1.2.11 ふりがながいらぬ

いまの新聞はだいぶ文字が大きくなってきたが、それでもふりがなは文字が小さい。濁点・半濁点を見極めるのは大変である。

ローマ字ではふりがながいらぬ。目に負担が少ないと言えよう。

### 1.2.12 濁点・半濁点が小さくて見づらい、ということがない

「ヘッド」と「ベッド」、「ホップ」と「ポップ」は読み間違えやすいが、ローマ字では全く別の文字をあてるので間違えない。

### 1.2.13 小書きとそうでないカナとを見間違えることがない

「ウオツカ」はいつのまにか「ウオッカ」になってしまったが、ローマ字ではそれはない。

### 1.2.14 訓令式・新日本式・ヘボン式では、四つがな「じぢずづ」の問題が発生しない

「稲妻」は現代かなづかいでは「いなづま」だが、語源を知っている人は「いなづま」と書きたくなる。これらのローマ字ではそれがない。inazuma である。

### 1.2.15 分かち書きによって、古典文学が親しみやすいものになる

「かこつべき故を知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらん」は「源氏物語」(若紫)の有名な歌だが、kakatou beki yuwe wo siraneba obotukana ika naru kusa no yukari naru ran とすれば「おぼつかないかなる」あたりの誤読が防げる。品詞分解も容易になる。

## 1.3 外国人にとって

### 1.3.1 日本語を学び始める際の敷居が低くなる

まず、日本人が外国語を学び始めるときのことを考えよう。

いわゆるロシア文字(正しくはキリル文字)を使うロシア語は、字母が ABC でないからという理由でドイツ語・フランス語よりも敬遠される。西洋古典語では、ギリシア文字を使うギリシア語は、ABC を用いるラテン語よりも学ぶ人が少ないと思われる。字母が 22 しかない聖書ヘブライ語でも、文字が全く違うからと敬遠する人が多い。フィンランド語は文法がかなりほかの西洋語と違うらしいが、ABC を基礎とするため入門のときの敷居が低いと思われる。

文字が違うことは、その外国語を学んでみようかと思った場合の障害になりえるのである。

次に、外国人が日本語を学ぼうとするときのことを考えよう。

漢字かなまじり文は、ひらがな・カタカナが 50 字ほどずつあるのに加えて、数千字はあると言われる漢字を学ばなければ読みこなせない。しかも、一つの漢字に、複数の音読み・訓読みがあるのが普通である。

ひらがな・カタカナをやさしいと思うのは、日本人が子どものときから見慣れている文字だからであって、初めて習う人には、日本人がヘブライ語の **יהוה** (こんにちは) を見るときのように目新しいはずである。

ローマ字を用いた日本語教室なら、最初の時間から、実際の文章にはいることができよう。

いまは、ローマ字を使って学べるのは聞くこと・話すことだけで、読み書きはできないから、ローマ字による日本語には学ぶ価値をあまり感じないかもしれない。もしも新聞・雑誌がローマ字書きでも出るようになれば、大いに変わってくるであろう。

日本語教育にたずさわっている人の話では、日本語は、漢字かなまじり文による表記を除けば、それほど特殊なむずかしい言語ではないそうである。

## 1.4 その他

### 1.4.1 日本語の音節を「子音+母音」と分けて理解するのは合理的である

かなはおよそ 50 文字ある。これは五十音図が 5 × 10 であるのに関係する。ローマ字であれば、濁音・半濁音を含めても 20 文字ほどで済む。

オトに注目すると「マ : ミ = ナ : ニ」が成り立つが、かなではこの四文字は別々に覚えなければならぬ。ローマ字では ma : mi = na : ni となり、覚える量が少なくて済む。字はまだ知らないが日本語は話せる子どもに対し、「マは ma, ミは mi, ナは na」と教えると、「ニは ni」と推測ができるはずである。

## §2 いろいろなローマ字つづり

### 2.1 日本式

五十音図にもっとも忠実な方式である。ダ行のヂヅヂャヂュヂョは標準語ではザ行のジズジャジュジョ zi zu zya zyu zyo と同じオトであるが di du dya dyu dyo と書き分ける。「鼻血」hanadi のように、元がタ行とわかる場合にだけ d を用いるやり方と、歴史的かなづかいでダ行だったものはすべて、たとえば「図」も du と書く、というやり方がある。よって、四つがなの問題が発生する。

五十音図とは、いまのわれわれにとっては、動詞の活用にもとづいて清音である直音を表にまとめたものである。よって、動詞の活用がつづり字の上で規則的になる。たとえば、tatanai, tatimasu, tatu, tatu toki, tateba, tate で tat- が共通となる。

寺田寅彦全集でこのローマ字で書かれた文章が読める。

### 2.2 訓令式

日本式とほとんど同じである。ダ行のヂヅヂャヂュヂョも zi zu zya zyu zyo とつづる点が異なる。

昭和 29 年 12 月 9 日付内閣告示第一号がこれである。いまや事実上日本で唯一のローマ字推進団体となった「日本のローマ字社」はこれを推す。

### 2.3 ヘボン式

英語の中で日本語の固有名詞を写すのによく使われる。

日本語のそれぞれのオトが、英語を話す人にどう聞こえるか、にもとづいて決められたつづり字である。

訓令式との違いを述べれば、シシャシュショが shi sha shu sho, チツチャチュチョが chi tsu cha chu cho, フが fu, ジジャジュジョは ji ja ju jo とつづる。ヂヅヂャヂュヂョはジズジャジュジョと同じオトなので書き分けない。また、ンは m, b, p の前では m とつづる。

ただし、英語話者にどれだけ正確に読まれるかはわからない。英語では Magi(東方の三博士)を「メイジャイ」と読むので、kaji(火事)は「ケイジャイ」となると聞いたことがある。

### 2.4 新日本式

昭和 24-25 年の文部省ローマ字調査審議会つづり方部会に服部四郎氏が提案したという方式である。(参考文献:服部四郎「新版 音韻論と正書法」(大修館書店 1979 年))

訓令式とほとんど同じである。チツチャチュチヨを ci cu cya cyu cyo とつづる点のみが異なる、と言ってよい。

ただし、その根拠は、日本式・訓令式とは大きく異なる。優れた言語学者が日本語のオトを聞き、また、発音の際の口や舌の形を調べると、サとシの子音は異なるが、それはサ行だけの現象ではなく、ほかの行でも起こっている。たとえば、気づきやすいのはナとニの子音の違いである。イ段の子音は、すべて、ほかの段の子音とは少し異なるのである。それなのにナとニは na, ni と同じ子音字で書く。同じ理屈で、サとシを sa, si と同じ子音字で書いてもよい、いや、書くべきだ、となるそうである。

こう決めると、シとスの前に [t] をつけたチとツを同じ子音字で書くことになる。それを仮に c とする。ci cu である。また、サ行の子音を有声音にして前に [d] をつけるとザ行となることから、ザ行を同じ子音字、たとえば z で書くのも妥当となる。タテトが ta te to, ダデドが da de do であることは明らかであろう。するとタ行は ta ci cu te to となるので、c は t に合流させ、t と書き直すのが妥当かもしれない。そう仮定してみると、タ行は ta ti tu te to となり、訓令式と一致する。そして、このタ行の子音を有声音にしたダ行も同一の子音字、d で書くことになる。チツの濁音は di du となるが、これはすでに zi zu と書いたジズと同じオトであるので d = z となる。これは da と za が違うオトであることに矛盾する。よって c は t と書き直さない方がよい、となってこの方式にたどり着く。

オトを聞いて決めた、という点でヘボン式と似ているように見えるが、英語を話す人にどう聞こえるか、ではなく、多くの言語に精通した、優れた言語学者の科学的な考察でどう把握されるか、に基づいている点がまったく異なる。

日本式・訓令式の側からは、新日本式ではタ行が ta ci cu te to となり、動詞の変化が tatanai, tacimasu, tacu, tacu toki, tateba, tate となって tat- と tac- の両方が現れるではないか、という反対論があるが、どのつづり方でもワ行の五段活用動詞は omowanai, omoimasu, omou, omou toki, omoeba, omoe となって omow- と omo- の両方が現れることに注意されたい。

私個人には、このつづり方がもっともしっくりくる。それは、チツを ti tu としない点にあると思う。オトで考えた「ナ：ニ＝タ：？」の答えは「ティ」であり、「ナ：ヌ＝タ：？」の答えは「トゥ」である。それなのに ti にチを、tu にツを当てているところに、日本式・訓令式の“気持ち悪さ”があると思う。ティもトゥも、特殊音ではありながら、現在では普通に使われるオトである。日本式・訓令式がなかなか広まらないのはこのせいでは、と私は推測する。(ただし、日本語のティは英語の tea (茶) を短母音にしたものとは異なる。イ段の子音に特有な分だけ、ta の子音とは異なる子音になっている。)

なお、新日本式は「外来語の表記」(平成 3 年 6 月 28 日付内閣告示第二号) との相性がきわめてよいことも付記しておく。

## 2.5 まとめ

以上の成り立ちから、日本式、訓令式、新日本式は「日本語式」、ヘボン式は「英語式」、とまとめることができよう。

日本語式の特徴は「シ」を si とつづることにある。ただしその理由は、日本式・訓令式と新日本式とで異なるのだった。英語式では「シ」を shi とつづる。

## § 3 日本語は日本語式ローマ字つづりで

### 3.1 ヘボン式はカタカナ英語の裏返しである

ヘボン式は、「日本語を知らない英語の使い手でも、英語のように読めばそれなりに日本語らしく聞こえるよう、英語でふだん使う文字を使ってつづったもの」である。

ここで「日本語」と「英語」とを入れ替えてみると、「英語を知らない日本語の使い手でも、日本語のように読めばそれなりに英語らしく聞こえるよう、日本語でふだん使う文字を使ってつづったもの」となる。これはカタカナ英語のことである。

カタカナ英語は、本格的に英語をつづろうとする際には検討に値しない。同様に、本格的に日本語をつづろうとする際には、へボン式は検討に値しない。

### 3.2 日本語の「シ」は英語の shi とは異なるオトである

きちんとした英語の発音を指導する教師は、英語の she(彼女)を日本語の「シー」のように発音してはいけないと言うはずである。

このことから、日本語の「シ」と英語の shi とが異なるオトであることがわかる。「shi は日本語の「シ」を正しく表している」というのは間違いである。

### 3.3 へボン式は「ナ」と「ニ」の子音を書き分けない

英語の na と日本語の「ナ」はほぼ同じと言えるが、英語の ni と日本語の「ニ」は子音が異なる。きちんとした英語の発音を指導する教師は、英語の knee(ひざ)を日本語の「ニー」のように発音してはいけないと言うはずである。しかしへボン式は「ナ」「ニ」を na, ni とつづって子音を区別しない。このことから、へボン式は日本語のオトを正しく表しているというのは間違い、とわかる。

### 3.4 文章を書いているうちに、英語式から日本語式に変わってゆく

経験上、そうである。単語だけを tashizan のように書いているうちはへボン式でも、tasite mimasita などと文章を書くと、日本語式のよさが感じられてくる。

### 3.5 日本語式への批判「si をシと読むと英語学習の妨げになる」について

chant は英語なら「チャント」、フランス語なら鼻にかかった「シャン」のような発音になる。同じつづりが異なる読み方をされることは、同一の文字を使っている言語の間ではごくふつうに起こる。英語と日本語とで si の読み方が違うのもそれと同じである。

英語の [si] は日本人には難しい発音のようである。このことは、つづり字とは全く関係のない話である。最初にこのオトを習うのは字母名 C であろうが、その際にはつづり字は示さない。

予習してこなかった生徒がイチカバチカでローマ字読みして笑われたことを「ローマ字の功罪」と書いているのを読んだことがあるが、ローマ字を習っていなければ沈黙しただけのはずである。なぜローマ字に「罪」があることになろうか？

この、予習してこない生徒の問題は、同じ ABC を使っている言語の間では日常的に起こっていると想像される。

また、もしもこの批判が正しいなら、「学校」を「がっこう」と読ませると、中国語を学ぶ際に「学校」を xuéxiào と正しく読めず、中国語学習の妨げになる、という理屈になる。

## § 4 新しい告示を出すとしたら

### 4.1 日本語式の中での統一にはまだ時間がかかる

日本語をローマ字で書く際には日本語式ローマ字を使うのが妥当であることは上に述べたが、日本式・訓令式・新日本式のどれがよいかは、まだ検討の余地がある。いますぐ方針を決め、看板などを書き直す、というのは早すぎると思う。

### 4.2 日本式・訓令式・新日本式・へボン式を混ぜて使っても混乱はない

日本語式の日本式・訓令式・新日本式、それに英語式のへボン式を合わせても、同じつづり字が別のオトをあらわすことはないので、混ぜて使っても混乱は生じない。(例外は ti, tu などで、日本式・訓令式では「チ」「ツ」と、新日本式・へボン式では「ティ」「トゥ」と読むが、「ティ」「トゥ」が特殊音であるため、大きな問題にはならないと思う。)

なお、(いわゆる)ホームページの URL, メールアカウント名を見てみると、ヘボン式が多い中で、si, sya, syu, syo は日本語式が使われているのをしばしば見かける。それに対し、チツを ti, tu とするのは少ないように思われる。

一方、ヘボン式の中にもツを thu とつづるなどの間違いが見受けられる。

### 4.3 もしも改定するなら、第2表に新日本式を加えたい

ci cu cya cyu cyo を加えるだけである。

### 4.4 英語の教科書に日本人名を書く際、日本語式ローマ字を用いるよう

そうならばそれに統一されるであろう。「氏-名」の順に書くことは定着しつつあるではないか。

### 4.5 それ以外の教科書でも日本語式ローマ字を用いるよう

「情報」の教科書で、プログラムの例の中の変数名がヘボン式、というのを見たことがある。

## § 5 国民に対し広めていただきたいことがら

### 5.1 ローマ字も、日本語の文章を表記する方法であることへの理解

固有名詞を英語の中で使うためだけのものではないことが理解されるようにしていただきたい。

### 5.2 「英語」と「日本語のローマ字書き」との区別

看板に「Ueno Eki」と書くのは日本語のローマ字書きであり、「Ueno Station」とするのは英語である。

### 5.3 「ローマ字は戦後に GHQ が持ち込んだもの」というような誤解の解消

一部にこのような誤解があるようである。

### 5.4 「アルファベットは、言語によって発音が違う」ことへの理解

英語に加えて、ABC を使う第二外国語として履修する人が増えることを期待する。私自身、ドイツ語を習ってみて初めて、名前の Jun'ichi というヘボン式つづり字に疑問を持ち始めた。(中国語も、ピンインを使うのでこれに含めてよい。)

高等学校「世界史」の教科書では人名のつづり字も載せるようなので、それを利用できないか。

### 5.5 日本式・訓令式が、「日本でしか通じない」「国粹的」という誤解の解消

フランス語のつづり方は、フランス語でしか通用しないが、世界中でフランス語を書くのに使われている。

### 5.6 国際的＝英語式を用いること、という誤解の解消

日本エスペラント協会は訓令式で住所を書いていることが参考になろう。

## § 6 分かち書きは、ほぼ、決まっている

いつとき、妙に凝った流儀があったが、いまでは平易なものにほぼまとまっている。

- ・ 自立語は前の語から切り離して書く。
  - 形容動詞は「名詞 + だ」として扱い、「だ」は切り離す。
- ・ 付属語を前の語から切り離すかどうかは、単語ごとに、個別に決める。
  - 原則として、未然・連用・假定形に続くものは切り離さない。ほかは切り離す。

「新年会」「晴れ渡る」などの複合語を一語と扱うか二語と扱うかは重要ではない。いろいろ試して、決まるのを待つのがよい。迷うときはハイフンを入れてつなぐ。hare-wataru のように。

## §7 パソコン、インターネットに関連して

### 7.1 ローマ字入力には反対

「がっこう」と打ち込むために gakkou と打つのであれば、本来なら gakkō と書くローマ字の表音性が失われる。

かなを直接打ち込む方式がよい。が、それは今のかな配列とは限らない。

たとえば、左手が担当する 15 のキーで五十音図の「ア行」「カ行」……を指定し、続いて右手で「ア段」「イ段」……を指定するなど。（実際には、これでは組み合わせが足りない。）

このようなアイデアはいくつもあるようだが、いまのパソコンで実現するにはかなりの知識がいる。現行のかな漢字変換入力ソフトに、「キーの組み合わせ」と「打ち込まれるかな」との対応をファイルでカスタマイズできる機能がないのが惜まれる。

### 7.2 「ô」「ɑ」などの「^」のついた文字が使えるように

日本でふつうに売られているパソコンが、そのままではこれらの文字が使えない。

私はローマ字文を書くときはキー配列をスペイン語にして使っている。日本語とスペイン語との切り替えがめんどろである。

### 7.3 漢字かなまじり文からローマ字書きへの「自動翻字」ツールがほしい

自動翻訳ができるのだから、それよりはるかに容易にできるはずである。

これができると、ローマ字書き日本語は学んだが漢字かなまじり文は学習途中、という外国人にとって便利であろう。

## 付録:ローマ字のつづり方

日本式	訓令式	新日本式	ヘボン式
a i u e o	a i u e o	a i u e o	a i u e o
ka ki ku ke ko kya kyu kyo	ka ki ku ke ko kya kyu kyo	ka ki ku ke ko kya kyu kyo	ka ki ku ke ko kya kyu kyo
sa si su se so sya syu syo	sa si su se so sya syu syo	sa si su se so sya syu syo	sa shi su se so sha shu sho
ta ti tu te to tya tyu tyo	ta ti tu te to tya tyu tyo	ta ci cu te to cya cyu cyo	ta chi tsu te to cha chu cho
na ni nu ne no nya nyu nyo	na ni nu ne no nya nyu nyo	na ni nu ne no nya nyu nyo	na ni nu ne no nya nyu nyo
ha hi hu he ho hya hyu hyo	ha hi hu he ho hya hyu hyo	ha hi hu he ho hya hyu hyo	ha hi fu he ho hya hyu hyo
ma mi mu me mo mya myu myo	ma mi mu me mo mya myu myo	ma mi mu me mo mya myu myo	ma mi mu me mo mya myu myo
ya yu yo	ya yu yo	ya yu yo	ya yu yo
ra ri ru re ro rya ryu ryo	ra ri ru re ro rya ryu ryo	ra ri ru re ro rya ryu ryo	ra ri ru re ro rya ryu ryo
wa	wa	wa	wa
ga gi gu ge go gya gyu gyo	ga gi gu ge go gya gyu gyo	ga gi gu ge go gya gyu gyo	ga gi gu ge go gya gyu gyo
za zi zu ze zo zya zyu zyo	za zi zu ze zo zya zyu zyo	za zi zu ze zo zya zyu zyo	za ji zu ze zo ja ju jo
da di du de do dya dyu dyo	da zi zu de do zya zyu zyo	da zi zu de do zya zyu zyo	da ji zu de do ja ju jo
ba bi bu be bo bya byu byo	ba bi bu be bo bya byu byo	ba bi bu be bo bya byu byo	ba bi bu be bo bya byu byo
pa pi pu pe po pya pyu pyo	pa pi pu pe po pya pyu pyo	pa pi pu pe po pya pyu pyo	pa pi pu pe po pya pyu pyo